菊とヒッピーと孤独

夫馬基彦

motohiko fuma

ツピーと独

motohiko fuma

福武書店

夫馬基彦（ふま・もとひこ）
一九四三年、愛知県一宮市生まれ。早稲田大学仏文科中退。七七年「宝塔湧出」で中央公論新人賞受賞。「緑色の渚」「金色の海」「紅葉の秋の」が、第97・98・99回の芥川賞候補作となる。著書は『夢現』（中央公論社）『栗平・シンジそして二つの短篇』『金色の海』『紅葉の秋の』『六月の家』（以上福武書店）『美術館のある町へ』（創隆社）『熱と瞑想』（烏書房）など。

菊とヒッピーと孤独

一九九〇年七月一〇日　第一刷印刷
一九九〇年七月一六日　第一刷発行

著者　夫馬基彦
発行者　福武總一郎
発行所　㈱福武書店
東京都千代田区九段南二―三―一八
〒一〇二　電話(〇三)二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七
本文印刷　大日本印刷
製本　加藤製本
平版印刷　栗田印刷

（落・乱丁本はお取替えいたします）
（定価はカバーに表示してあります）

©M. Fuma 1990
Printed in Japan

ISBN4-8288-2346-8-C0093
NDC913 194 188p

目次

その日のこと　5
ロナと青空　45
同伴者　115

装画 平賀 敬

装丁 菊地信義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

菊とヒッピーと孤独

その日のこと

大明さん。妙なものだな。その日、大明さんはどう思っていたのか知らないけれど、ぼくにとっては妙な日だった。本当に妙な日だった。恥ずべきというか、憂鬱なというか、あるいはひょっとしたらただドジなだけの日だったのかもしれないのだが、ともあれぼくにとっては、だいぶ時間のたった今でもへんにこだわりの残る一日だった。

直接の理由は、もちろん大明さんにもすぐ想い浮ぶはずのあの一件のせいだ。

実際、あれは全く参ったね。あの時も思わず口走ったけれど、あんな経験は生れて初めてのことだった。今でも思い出すと、あのゾロリとしたような、ベタベタした、気色の悪い冷たい感触が蘇って、どうにも不愉快になる。むろん、あの種のことは世間ではしばしばあることだろうし、他人である大明さんや第三者にとっては、多分に滑稽な一些事にすぎないだろうことも十分承知しているものの、ぼくにとっては、何と言うか、あの曰く言

いがたいゾロリとした感触自体が、あの日一日、いや、ひょっとしたら前後数ヵ月間、ぼくを蔽っていた、これも曰く言いがたい得体の知れぬ気分の象徴のような気さえするのだ。何かもどかしいような、分るようでよく分らぬ、正体不明の、しかし確固として存在する何ものかの、突然の流動化、粘液化……。何かそんな感じのことどもだ。

で、もしかすると大明さんにしても、あの日のことにはいささかの困惑を持ち続けているやもしれぬと思い、それで大明さんに語りかけるつもりでこれを書き出したという訳。

さて、当然ながらコトはあくまでぼく個人の一日というにすぎないから、過剰に読みこんでもらう必要もなければ、退屈なら捨ててもらっても構わないことをお断りした上で始めるのだが、何はあれぼくは、あの日は午前七時半ごろに起きた。もちろん、これは翻訳をしたり文章を書いたりの、気ままなひとり暮しであるぼくとしては、随分早い。ふつうならせいぜい八時半か九時、時には九時半すぎといったところが常だろう。おまけにあの日は、最後とはいえまだ松の内でもあったから、一応二、三日前からぽちぽち始めていた仕事もまだ腰が坐ったとは言えず、前夜も、正月に田舎の兄から貰ってきた年代物の外国ワインを、ひとりで遅くまで飲み続けたりした後だったので、軀も精神も相当ゆるんで眠りこけていた。

起きたのは、そこへ突然の電話がかかってきたからだ。今は閑職（失礼！）になったら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しいとはいえ、元来は新聞記者である大明さんにはさほど珍しいことでもなかろうけれど、ぼくのように終日家にいるだけのしがない坐業者にとっては、これはかなりの意外事だ。肉親や親しい知人の不慮の事故や死など、よほどの場合に年に一度あるかないかのことだろう。で、ぼくは、コールの第一音でハッと脳髄に衝撃を受け、一瞬うろたえたのち、しかし四十五にもなった男がこんなとき慌てては体面にかかわると咄嗟に頭をめぐらし、蒲団から上半身を起したまま、コールの第二音から第三音へかけて意識的に呼吸を整え、だが結局は第三音の終りまでは待てずに腕を伸ばして受話器をとった。

「はい、もしもし」

声も意識的に落着かせたつもりだったが、やはり少しは上ずっていたかもしれない。

すると受話器の向うからは、いきなり何の枕詞も挨拶もなく、

「あ、キミ、まだ寝てたのか。とうとうだぞ。テレビをつけてみろよ」

と親しい友人の声がいつもよりだいぶ甲高く聞えてきた。意味はすぐ分った。つまりは、天皇の死、である。分った理由は、直接的には「とうとう」と「テレビ云々」の言葉であり、背景的にはその友人とぼくが最近しばしばその問題を熱心に話題にしていたせいだ。

「そうかあ。うん、分った」

ぼくもやや甲高く答えた。甲高くなったのはやはり「とうとうか」と思ったためであり、もう一つには早朝わざわざ知らせてくれた友人への一種の答礼というか、つき合いのゆえもあった気がする。こんな際つき合いなぞと言うとそぐわぬ感もあるかもしれないが、それなら「感情の伝染」の意識的受け容れ、と言い換えてもいい。つまり、頭の中ではぼくも、十分に興奮すべきこと、として把えていた訳だ。

だが、妙なことにそのあとぼくは一見慌ただしく電話を切ったものの、すぐテレビをつけに立ちはしなかった。テレビは隣のダイニング・キッチンにあるせいもあるが、とにかくぼくは蒲団から出ようとはせず、一旦起き上っていた上半身をいつのまにか横たえてさえいた。そうしてぼくは、「ふうーむ」とひとりごちて虚空を見ていた。茫然としていた訳でもなければ、次なる行動のために思いをめぐらしていた訳でもない。この辺が未だにぼく自身でもよく分らぬのだが、では感慨に浸っていたのかと言えば、ある程度そうだとも言える一方、とりあえず肉親などの事故でなくてホッとした安堵の情も混っていた気がするし、もっと単純に、要するに寒いダイニング・キッチンにすぐ出ていく気がしなかっただけという気もせぬではない。ともあれぼくは、こうして蒲団の中で暫くぬくぬくとしていた。

これはぼくにとっては意外なことだった。

なぜならぼくは、昨年の九月、天皇の出血病臥以来、その推移には随分関心を払ってきたからだ。いつ亡くなるのか。その時、そしてそれ以降、世の中はどうなるのか。何か大変事が起るのか、あるいは異常事態や突発事が頻発するのか。国民はどう反応するのか。世界ではどう影響が出るのか。……そんなことどもをずっと考えてきた。理由は、一言で言えば「王の死」だからだ。何しろ「王の死」と言えば、往昔では草木も枯れ、天地すべて暗闇に閉ざされたこともあるそうだし、そこまでいかなくとも津々浦々に啾々と哭き声が満ちたという史書は東西を問わず数多いではないか。時代はむろん違うが、一体、日本の場合はどうなるだろう。「王」のイメージは世界史の中では古びたが、日本ではつい四十年前までそれは神ですらあったのだから。とまあ、そんな訳だ。

ちょっと大袈裟すぎはしないかと大明さんは言うかもしれないが、しかし周知のように九月以降の、あのいわゆる「自粛」ぶりなるものを見れば、この調子でいけば本番の暁にはどうなることかと思ったのは、あながちぼくばかりではなかろう。少くとも、善悪好悪価値観はともかくとして、その日から暫くは、六十年ぶりの世紀のドラマが始まることだけは間違いない、と思ったのもぼくばかりではなかろう。だから、実は、ぼくは去年の夏頃から久しぶりの外国旅行を計画しかけていたのに、それもとりやめて、いわば待機していたほどなのだ。

それなのに、気づいたらぼくは、その当の朝、たかが蒲団から出ることさえせず、のうのうと緩んだ軀を横たえていたのだ。

これは一体、どういうことか。

ぼくはそれに気づくと同時に、首をひねりながらしばし考え、やっと起き出した。考えた結論は別にない。

そうして、パジャマ姿のままテレビをつけると、画面では黒服を着たアナウンサーが、厳粛な面持で天皇の死を伝えていた。暫くして人物が変ると、今度は政府の官房長官なる人が殆ど同じことを言った。「本日午前六時三十三分、大行天皇が……」というあれである。大行天皇という言葉は最初、意味がとれなかったが、やがて放送記者の一人によって解説された。チャンネルを変えると、どの局でも似た映像を映していた。黒服の人物に厳粛な顔や声音、黒い大型車の出入りに、荘重な音楽と早くも回顧的映像の流れ。

ぼくはそれらを、最初は突っ立って見、ついでパジャマから普段着へと着替えつつ眺め、洗面所へ入って出、トーストと牛乳による朝食を作り、食べつつ見た。こんな際失礼と言えば失礼かもしれぬけれど、これはいたしかたない。人間の日常とはそういうものであり、また、テレビと受信者の関係というのも、そういうものだ。ぼくは食事を終えると、鏡の前に立って、時々テレビの様子を窺いつつ頭髪のつくろいをした。大明さんも知

っての通り、ぼくの髪は近頃とみに薄くなった上、元来がくせ毛だから、耳の上あたりの毛はこすったり押えたりしないとうまく寝ないし、頭頂部の地肌を隠すためには、左から右へかけて少ない毛をそっと均等に撫でつけねばならない。これを怠ると、頭頂部が角度次第ではピカピカ光り、遠目にもはっきり目立ってしまうのだ。もとより自然の成り行きだから、必要以上に抵抗しようとは思っていないのだが、人によっては明らさまにニヤついたり、若い人などの中には一種の生理的嫌悪を感じる人もいるらしいので、一応の身だしなみとして日課にしているのである。

テレビはその間もその後も、相変らず似た画像を流し続けていた。黒い服に、黒い車に、古いフィルムの混じる回顧映像に、そして荘重な音楽に、厳粛な声音。それらは退屈とも言えたが、しかし時折り元号のことや座談会、思わぬ人物へのインタビューなども混じるので、消してしまう気にもなれない。ぼくは、これではどうせ今日は仕事にはなりそうもないと思いつつ、紅茶を淹れてテーブルの前にどっかり坐った。

そうして、その時ふっと気づいた。テレビがカラー放送であることにだ。なぞと言うと、何を異なことをと思われようが、それまでのぼくはいつしか画面が半ばモノクロームのような錯覚に陥っていたのだ。訳はむろん画面に黒が多い上、実際に白黒フィルムなぞも登場していたせいだろうが、一つには以前、台湾人の趙さんという人から、昨年、台湾

で蔣経国総統が死去した時は、台湾のテレビが一ヵ月間白黒になったと聞いていたためもあろう。それを聞いた時「へーエ」と随分強い印象を受けたのが、潜在意識になっていたのに違いない。

実際、その趙さんと話した時は色々面白かった。会ったのはもう二ヵ月近く前だったろうか。趙さんは先述の早朝電話の主である友人の、仕事上の取引相手で、友人から面白い人物だから一度会ってみないかと誘われ、友人の事務所近くのファミリーレストランで顔を合せたのだが、なるほど愉快な人物だった。歳の頃は四十八、九、つるつると張りさけんばかりの大きな丸顔に、これまた随分大きな真ン丸の目玉をキラキラさせた、大人と少年をないまぜにしたような男で、会うなり、

「いやあ、こういう明るい場所(バショ)で、お友達と話せるなんてとてもいいデスネ。私、こういうの、大好きデス、本当デス」

などと満面の笑みと共に、何度も握手の手を振ったものだ。聞けば、何でも彼は幼年時代の日本統治下の様子を多少憶えているというし、大学も日本だったというから、話題にはこと欠かない。日本語は多少おかしいところもあるのだが、回転の早い、独特のトーンで進んでいくから、むしろこちらもリズミカルな気分になって話は弾んだ。で、短い間にぼくたちはすっかりリラックスした感じになったのだが、やがて彼は「そうそう、これだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com